

女子大学生におけるスポーツ参加の検討 (I)

——スポーツ参加の現状、動機および志向の調査——

高 見 和 至 (教育学部 社会教育学科)

山 川 岩之助 (教育学部 社会教育学科)

Abstract

This is the first part of a series of study to investigate sport participation in women's university students. The purpose of this paper is to investigate three points. The first was the actual conditions of sport participation in women's university students. The second was the factors seemed to effect female students' participation in sports. And the last was motivation and intention for sport participation.

The survey was conducted to 330 women's university students by questionnaire method. And as to motivation and intention for sport participation, principal factor solution method with normal varimax rotation was applied to the correlation matrix of all subjects.

Main results are summarized as follows:

1. To examine the actual condition of sport participation, the proportion of joining groups of sports, the frequency of sport activities and reading of sport magazines and newspapers, and the frequency of witnessing a game were become clear.
2. The factors seemed to effect sport participation were examined by address, times of attend school, the conditions of residence, the number of lecture per a week and conditions of labor, et al.
3. On motivation for sports, 7 factors were named Friendship, Social desirability, Character shaping, Recreation, Health and Beauty, Inducement, and Challenge and Achievement.
4. On intention for sports, 8 factors were named Fashion, Budo, Amusement sports, Physical training, Health, Out-door, Shooting, and Ball-game.

At the next part of this study, the factors determining women's university students' participation in sports will be examined by using cross tabulation and mulvariate analysis.

緒言

現代社会においては、様々な形態のスポーツが存在しており、教育目的や趣味娯楽として、健康や体力の維持増進のため、また自己実現のため等の目的からスポーツに関連する需要は増大している。

このような状況を反映して、スポーツの実施(スポーツ参加)に関する研究がなされている⁵⁾⁸⁾¹⁰⁾¹²⁾¹³⁾等。これらの研究から、スポーツ参加を規定する要因として生活レベル、過去の運動経験、家族構成、交友関係、健康状態、運動欲求、住居形態、スポーツ施設の有無等の要因が関与していることが明らかになっている。なかでも成人期以後のスポーツ参加には就学期間のスポーツ経験の有無が大きく影響することが報告されている²⁾⁹⁾。

ゆえに将来、各個人が個々の欲求に応じてスポーツを生活に導入することができるためには、就学時にスポーツ参加経験を持つことが大切な要因になってくる。この点は大学における体育・スポーツ教育の重要な課題の一つであろう。

女子大学生の生活環境をみてもスポーツを行なう機会は多くみられる、1. 授業・カリキュラムの一環、2. 同好会・部活動などの大学でのサークル活動、3. 地域のスポーツ団体、4. 民間のスポーツクラブなどがあげられる。しかしこうした多様な選択肢のなかで今後適切なスポーツ参加を促進していくためには、「どの程度の頻度で、どのような形態のスポーツを行い、そこに何の要因が影響しているのか」、またそれは「どのような動機からか」、「現在どんな種目に関心を持ち、実践しているのか」について明確にする必要がある。

そこで本研究では女子大学生のスポーツ参加を規定する要因を検討していく前段階として、以下の要因の現象記述を行なう。

1. スポーツ参加の現状について

本研究では「スポーツ参加」を単にスポーツ活動への参加(行なうスポーツ)に限るのではなく、スポーツ観戦や番組、雑誌の視聴購読(見るスポーツ)まで含めた把握を行なう。

2. 活動欲求、運動経験等、スポーツに関連した要因
3. 通学時間、授業時間数等、生活環境に関連した要因
4. スポーツ参加の動機
5. スポーツ参加に対する志向性

これらの要因を把握し内容を吟味したうえで、女子大学生のスポーツ参加を規定する要因の総合的な検討につなげる。

方 法

調査対象：千葉県のK女子大学に在籍している1年生，合計330名。

本調査では調査対象のスポーツ参加を規定する生活環境要因により具体的な検討を加えるため調査対象を一つの大学に所属している者に限定した。

調査方法：上記の対象に平成3年9月中旬から10月にかけて授業時間中に質問紙法によるアンケート調査を行なった。

調査内容：

1. フェイスシート スポーツ参加を規定する生活環境要因を検討するため以下の要因を調査した。
 - ・年齢 ・住所 ・住居形態(自宅・アパート) ・通学時間 ・交通手段 ・アルバイト
 - ・おこずかい(一ヶ月に自由に使える金額) ・勉強時間(授業時間は除く) ・授業時間数(一週間のコマ数)

2. スポーツ参加の状態を把握するため以下の項目を調査した。
 - ・過去の運動歴(小学校から高校までの部活動などの運動歴)
 - ・現在の部・サークル加入(スポーツ系・文化系)
 - ・スポーツサークル活動の5つの条件の充足度(1. 場所 2. 練習時間 3. 指導者 4. 仲間 5. 施設・用具の充実)
 - ・スポーツ大会/イベントへの参加
(平成3年4月以降、学外のもの)
 - ・スポーツの実施頻度(5段階;ほとんど無し～ほとんど毎日、授業以外)
 - ・スポーツの実施時間(一週間の平均運動時間、授業は除く)
 - ・スポーツ観戦の有無(平成3年4月以降)
 - ・スポーツ活動の阻害要因
(14項目、図9参照)
 - ・家族のスポーツ経験者の有無
 - ・スポーツ新聞・雑誌の購読頻度(4段階)
 - ・テレビ等のスポーツ番組の試聴頻度(5段階)/番組内容
 - ・現在のスポーツ活動に対する欲求の程度(5段階;全く思わない～強く思う)

3. スポーツ参加動機の調査

丹羽・村松(1979)が女子大学生のスポーツ参加動機を検討するために作成した質問項目(78項目)から60項目を選び、その一部を修正し用いた。評定方法は「まったくあてはまる」から「まったくあてはまらない」の6段階評定尺度法を用いた。質問項目は以下の9つのカテゴリから構成されており、スポーツ参加の動機を広範に捉えることができる。これによりスポーツ活動に参加させる心理的要因を検討する。

(9つのカテゴリおよび質問項目)

a. ホメオスタシス動機

1. 心身の状況から何となくスポーツをせずにはいられないから

b. 性的動機

60. スポーツをすると性的に解放感が味わえるから

c. 情緒的動機

2. 他のことをいっさい忘れ、夢中になれるから

3. 楽しいから

4. 気晴らしになるから

5. スポーツをしたあと、充実感が味わえるから

6. スポーツが好きだから

7. 試合での緊張感が好きだから

8. 日常での劣等感を忘れることができるから

9. スポーツをした後、気持ちがいいから

d. 活動性動機

10. 身体を活発に動かすことが好きだから

11. 思いきり体を動かせるから

e. 感性動機

12. 刺激を求めたいから

女子大学生におけるスポーツ参加の検討（I）

f. 好奇動機

13. 新しい経験をしてみたいから
 14. いろいろなことを経験してみたいから
 15. おもしろそうだから
-

g. 達成動機

16. 自分がどれだけできるかためせるから
 17. 意志を強固にするから
 18. 困難なスポーツに挑戦してみたいから
 19. 自分の能力の限界を確かめてみたいから
-

h. 親和動機

20. 友達ができるから
 21. 皆と一緒に協力できるから
 22. いろんな人と接することができるから
 23. 仲間と心がふれあえるから
-

i. 達成、親和動機以外の社会的動機

24. 家族にスポーツをしている人がいる
 25. 自分の好きな人がいるから
 26. 友達がしているから
 27. 家族が勧めるから
 28. 友達が勧めるから
 29. つきあいでやっている
 30. マスコミでよくとりあげられるから
 31. 就職の際、有利であるから
 32. 人に自慢できるから
 33. かっこいいから
 34. 自分の能力を他人に認めてもらえるから
 35. 自尊心を満足させることができるから
 36. 試合に出たいから
 37. 将来、スポーツ関係の仕事がしたいから
 38. 将来、自分の家族でスポーツを楽しみたいから
 39. スポーツのファッションが素敵だから
 40. 決められたことなので仕方なくやっている
-

j. 身体的動機

- 41. 体力の維持増進のため
 - 42. 身体がスマートになるから
 - 43. 姿勢がよくなるから
 - 44. 動作が美しくなるから
 - 45. 健康のために良いから
-

k. 技能的動機

- 46. スポーツが得意だから
 - 47. 得意な種目があるから
 - 48. 練習すると技術が上達していけるから
-

l. 人格形成的動機

- 49. いろんな人との人間関係を学べるから
 - 50. 決断力を養成するから
 - 51. 忍耐力を養成するから
 - 52. 勇気が養えるから
 - 53. 強調心が養えるから
 - 54. 統率力が養えるから
 - 55. 自分を変えることができると思うから
 - 56. さっぱりした明るい性格が養えるから
 - 57. スポーツを通して厳しさを体験できるから
-

m. レクリエーション的動機

- 58. 余暇を有効に過ごすことができるから
 - 59. 生活が楽しく豊かになるから
-

(分析方法)

60項目全てに因子分析(主因子法)を施し、因子の抽出を行なう。抽出された因子に対する各項目の負荷量から各項目の分類を行ない、さらに各因子の解釈を行なう。これによりスポーツ参加動機の構造を検討する。

4. スポーツ参加の志向性調査

調査対象が現在どんなスポーツ種目に関心を持ち、また実際に行なっているかについてスポーツ参加の志向性調査を行なった。表5の43種目について、以下の6段階で設定させた。

-
1. 関心がない。
 2. 関心はあるがやってみようとは思わない。
 3. きかいがあれば一度やってみたい。
 4. 初級レベル。たまに楽しむ程度。
 5. 中級レベル。習慣化している。
 6. 上級レベル。高い技能で楽しむ。
-

この6段階評定はスポーツ種目への関心の生起から実践のレベルまで含んでいる。つまり各スポーツ種目の特徴の認知から種目の選択、高い技能の獲得に至るプロセスを表している。本研究ではこのプロセスをスポーツ参加の志向性とし、6段階の評定によって把握する。

各種目に対する6段階の評定から、因子分析を行い。同様の因子負荷を示す種目群から、調査対象のスポーツ参加に対する志向性を検討する。

（分析方法）

43種目全てに対して因子分析(主因子法)を施し、因子を抽出する。抽出された因子に対する負荷量から各種目を分類し、それをもとに各因子の解釈を行う。

結果及び考察

調査結果を1.スポーツ参加の状況に関するもの、2.スポーツに関連した要因について、3.生活環境に関連したもの、4.スポーツ参加の動機および志向の4つに分類して述べる。

1. スポーツ参加の状況について

各種スポーツサークルへの所属の状況を見ると約半数が何らかのスポーツサークルに所属しているようである(図1.)。しかし在籍大学の運動部同好会には15.9%しか所属しておらず、むしろ他大学の運動部同好会に所属している者が多い。

授業以外での実施頻度をみると約4割の者はスポーツを行っておらず、定期的に継続してい

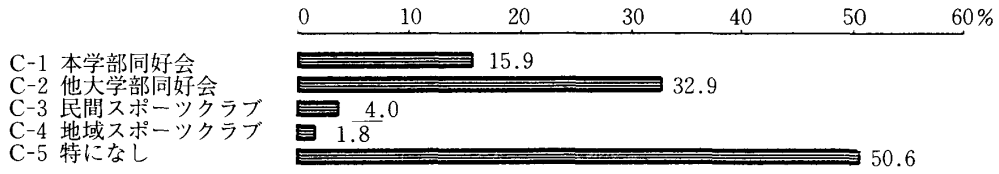


図1. スポーツサークルへの加入状況 (N=328)

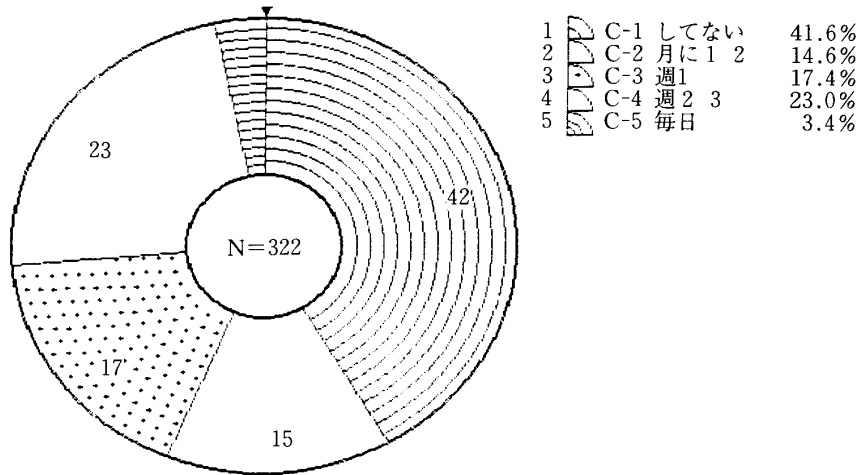


図2. 授業以外でのスポーツ実施頻度

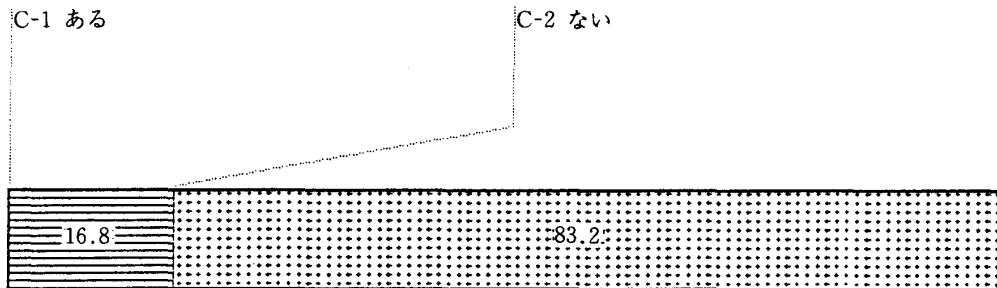


図3. スポーツ大会・イベントへの参加 (N=322)

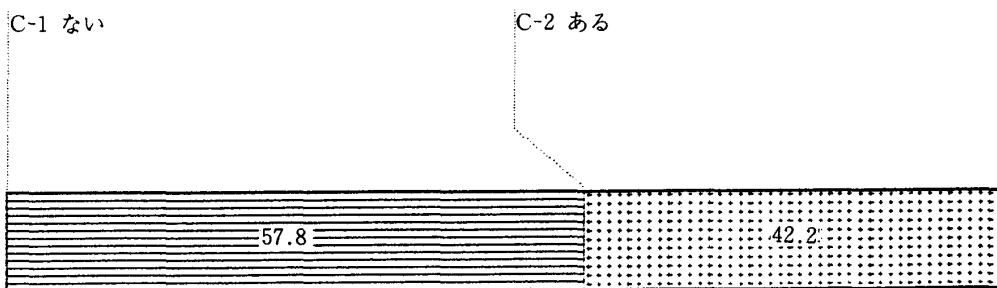


図4. スポーツ観戦の有無 (N=325)

女子大学生におけるスポーツ参加の検討（I）

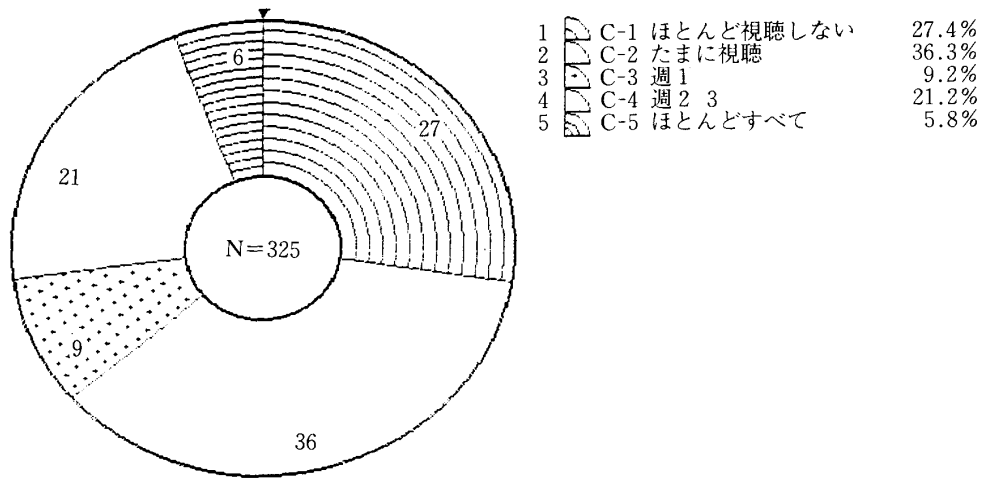


図5. スポーツ番組の視聴頻度

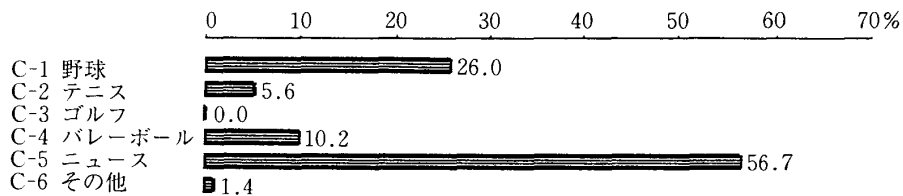


図6. スポーツ番組の内容

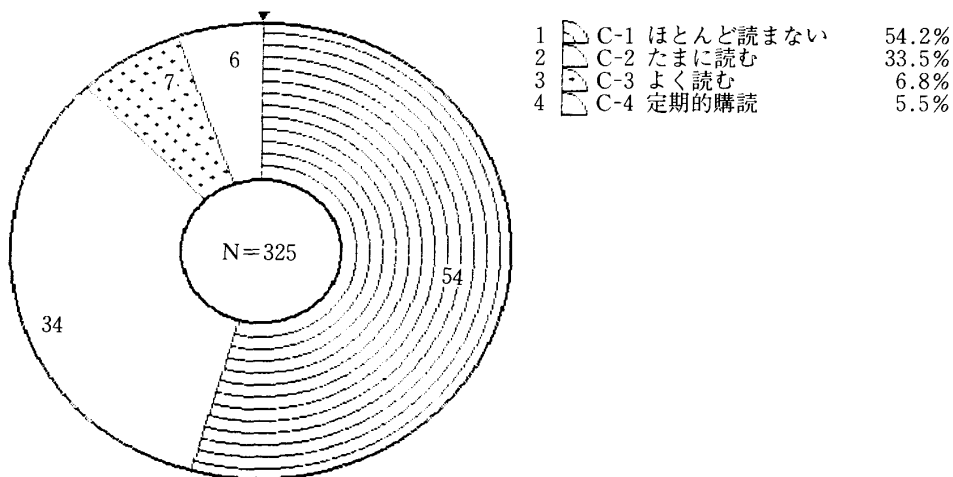


図7. スポーツ雑誌の購読状況

る者(週2日以上)は約25%に留まっている(図2.)。一週間の授業外の平均運動時間は110分で最小0分、最大312分であった。

平成3年4月以降の学校行事以外の試合、スポーツ大会およびイベントへの参加状況は「あ

る」が16.8%で大半のものは参加していない(図3.)。一方、スポーツ観戦の有無をみると、42.2%の者がスポーツ観戦の機会を持っており、その内容はプロ野球、大学対校戦などが多く見られた(図4.)。

スポーツ番組の視聴では、週1回以上の視聴者は全体の約36.%で(図5.)、その内容はスポーツ関連ニュース番組が半数以上、スポーツ種目では野球、バレーボールが多い(図6.)。またはスポーツ関連雑誌の講読状況をみると、「よく読む」・「定期的講読」を合わせても13%弱であった(図7.)。スポーツ参加の「観る」および「読む」部分についての関心は低いようである。

2. スポーツ関連要因について

スポーツ活動への欲求の程度の結果を図8. に示した。「やりたいと思う」と「強く思う」を合わせると80%になり、調査対象のスポーツ活動への欲求レベルは非常に高いといえる。

図9. はスポーツを行なううえでの阻害要因を14項目からみたものである。64.4%の者が「時間がない」をあげており、また「通学時間の長さ」を44%があげている。ゆえにまず時間的な条件がスポーツ活動の妨げになっているようである。つづいて「お金がかかる」の項目が約45%あげられており、金銭的負担が阻害要因になっていることがうかがえる。表1. は所属スポーツサークルと阻害要因のクロス集計である。スポーツサークルに所属していない群においても全体と同様に時間的な条件、金銭的負担が阻害要因になっている。

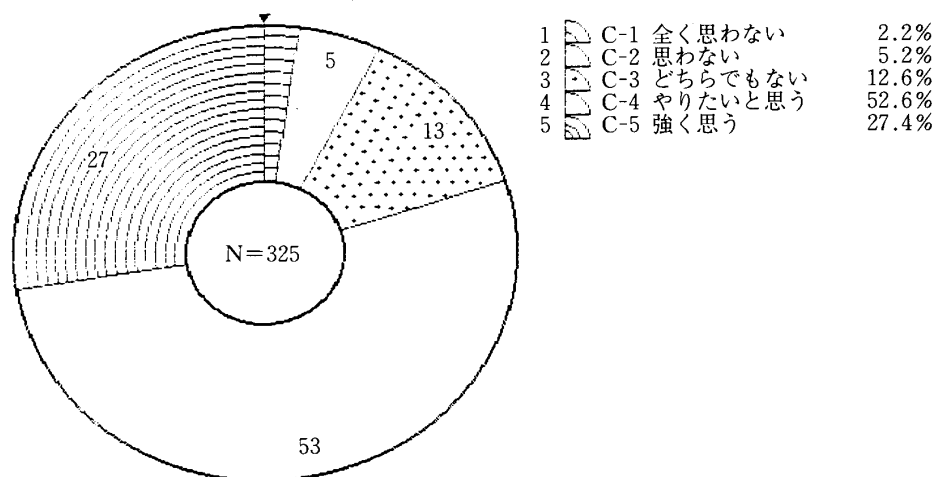


図8. スポーツ活動に対する欲求程度

女子大学生におけるスポーツ参加の検討 (I)

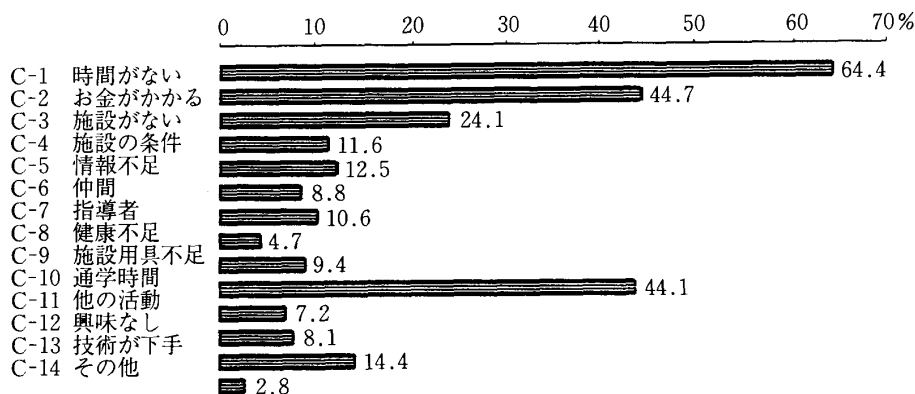


図9. スポーツを行ううえでの阻害要因

表1. 所属スポーツサークルと阻害要因のクロス集計 (%)

	1. 時間	2. お金	3. 施設無	4. 施設条件	5. 情報	6. 仲間	7. 指導者
所 属 (N)							
在籍大学 (52)	28 (53.8)	21 (40.4)	5 (9.6)	6 (11.5)	5 (9.6)	5 (9.6)	11 (21.2)
他大学 (108)	76 (70.4)	53 (49.1)	25 (23.1)	12 (11.1)	11 (10.2)	3 (2.8)	15 (13.9)
民 間 (13)	10 (76.3)	6 (46.2)	2 (15.4)	2 (15.4)		2 (15.4)	2 (15.4)
地 域 (6)	3 (50)	2 (40)		1 (40)	1 (20)	1 (20)	1 (20)
特に無し (166)	103 (65.2)	71 (44.9)	44 (27.8)	19 (12.0)	23 (14.6)	17 (10.8)	8 (5.1)

	8. 健康	9. 用具	10. 通学時間	11. 他の活動	12. 興味無	13. 技術	14. その他
所 属 (N)							
在籍大学 (52)	3 (5.8)	12 (23.1)	21 (40.4)	4 (7.7)		9 (17.3)	3 (5.8)
他大学 (108)	6 (5.6)	11 (10.2)	56 (51.9)	5 (4.6)	4 (3.7)	13 (12.0)	1 (0.9)
民 間 (13)		1 (7.7)	9 (69.2)			1 (7.7)	1 (0.9)
地 域 (6)	2 (40)		1 (20.0)		1 (20.0)		
特に無し (166)	5 (3.2)	8 (5.1)	63 (39.9)	13 (8.2)	21 (13.3)	24 (15.2)	6 (3.8)

図10.~14. は在籍大学および他大学のスポーツサークルに加入している者について各条件の充足度をみたものである。

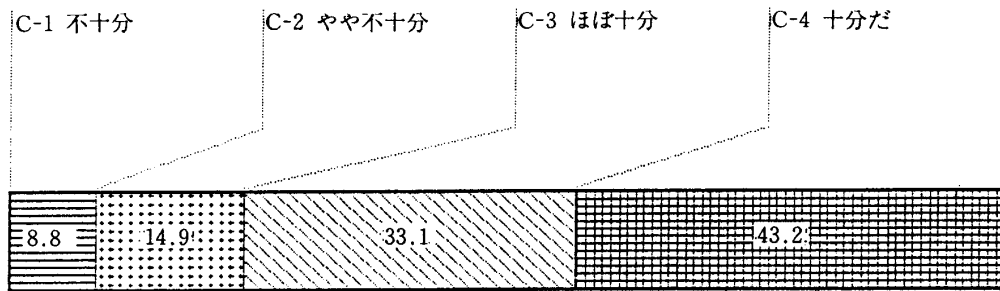


図10. 場所の確保 (N=148)

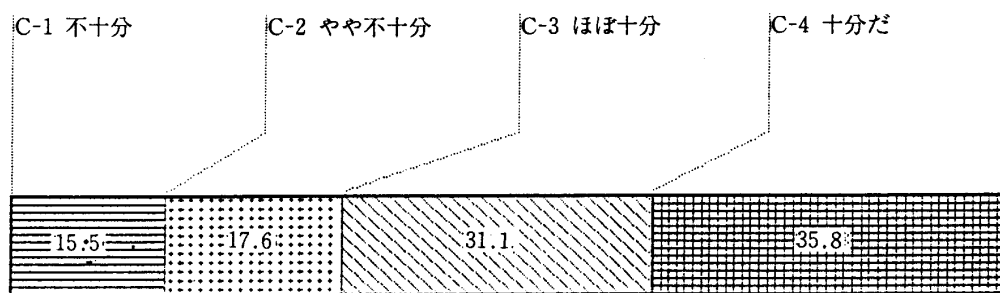


図11. 練習時間の確保 (N=148)

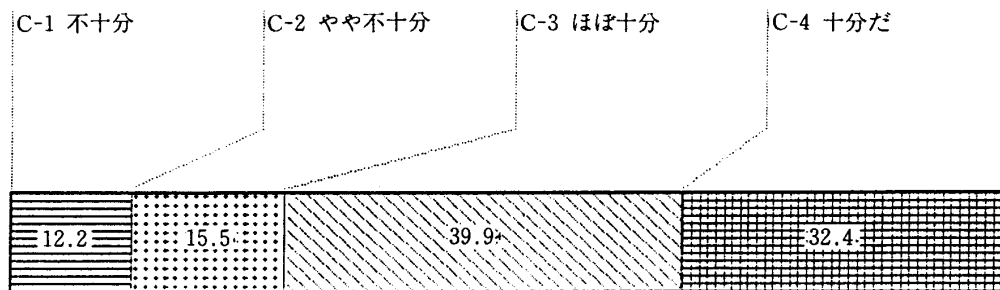


図12. 施設・用具の充足度 (N=148)

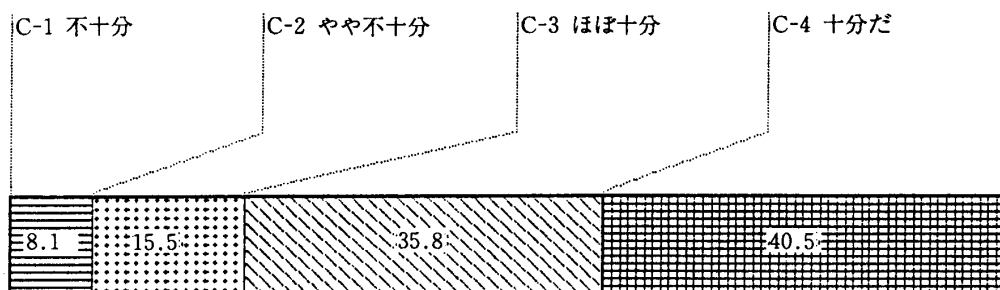


図13. 仲間の確保 (N=148)

女子大学生におけるスポーツ参加の検討 (I)

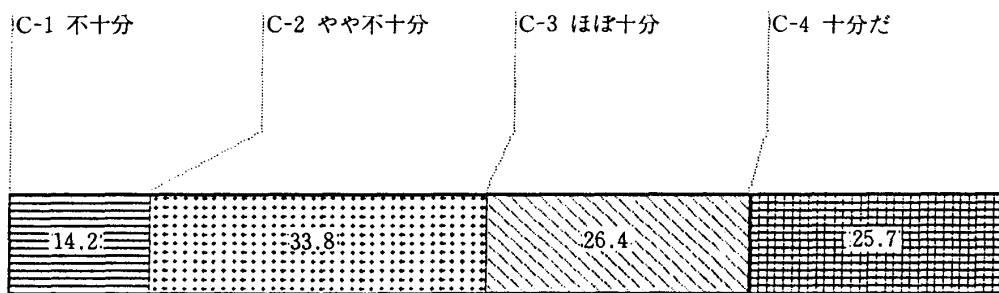


図14. 指導者の確保 (N=148)

活動の場所の確保, 施設・用具の充足, 仲間の確保については約7割以上がほぼ満足している, また練習時間についても半数以上がほぼ満足しており, 時間的な問題は活動時間よりも活動場所までの時間に在ると思われる。もっとも充足度が低いのは指導者の確保で, 48%が不十分さを示している。大学のスポーツサークルにおいては指導者の確保が難しいようである。

図15.~17. は調査対象の小学校から高校時代のスポーツ経験をみたものである。中学校では41.3%が運動部活動の経験を持ち, 民間・地域のクラブと合わせると半数以上がスポーツ経験を有している。しかし高校では運動部活動の経験者が約24%に減少している。

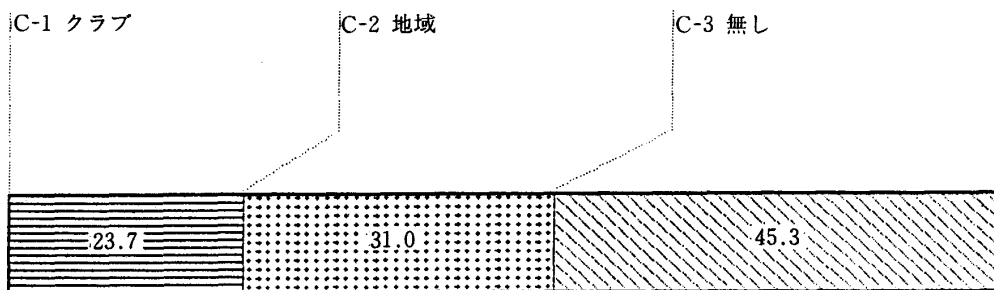


図15. 小学校での運動経験 (N=329)

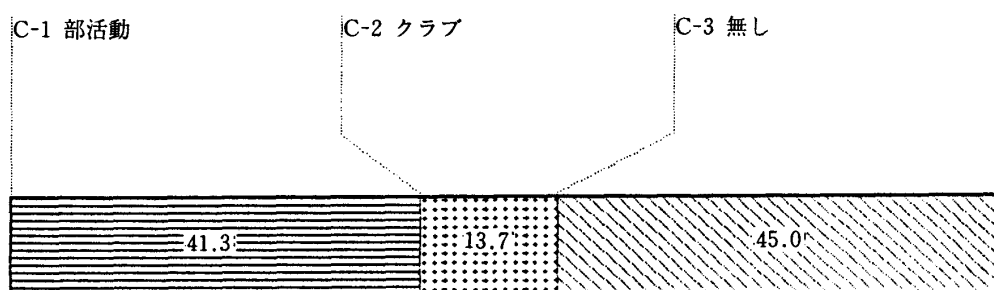


図16. 中学校での運動経験 (N=329)

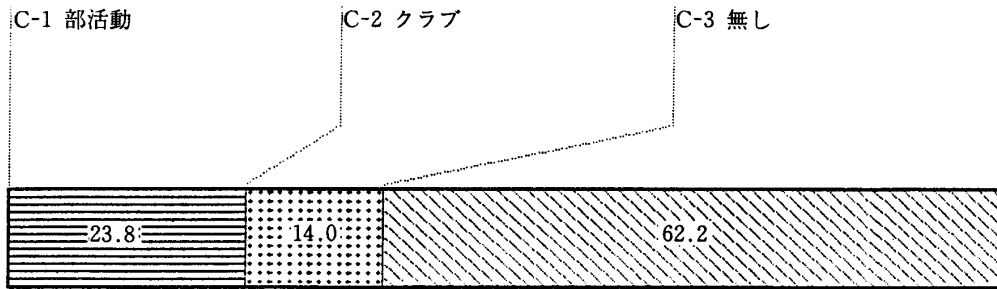


図17. 高校での運動歴 (N=328)

3. 生活環境要因について

図18.~24. に生活環境要因に関する結果を図示した。調査対象の居住地は東京都，千葉県で約7割を占めており(図18.)，約8割の者が自宅から通学している(図19.)。通学時間は平均75.1分(標準偏差35.7)，最大値165分，最小値5分であった(図20.)。また通学時の交通手段(図21. 多重回答)から，通学の形態は往復約2時間半，電車利用が一般的であろう。

アルバイトの実施状況を見ると調査対象の58.8%が行っており，週に4日以上，行っている者も25%みられる(図22.)。アルバイトの内容は販売員，飲食店勤務が多く，その他では

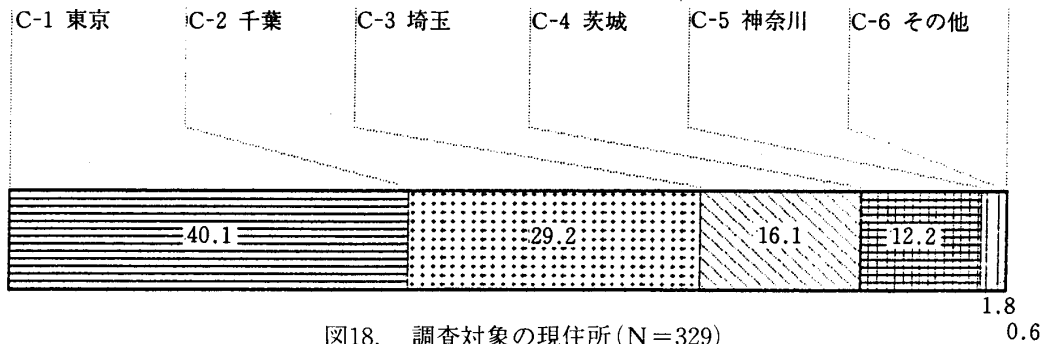


図18. 調査対象の現住所 (N=329)

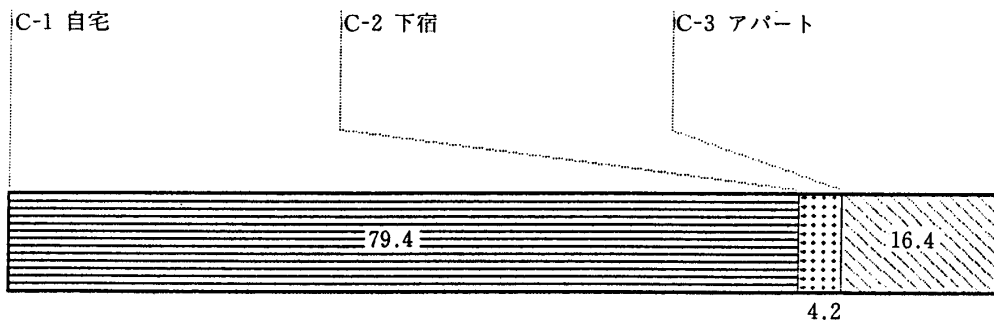


図19. 住居形態 (N=330)

女子大学生におけるスポーツ参加の検討 (I)

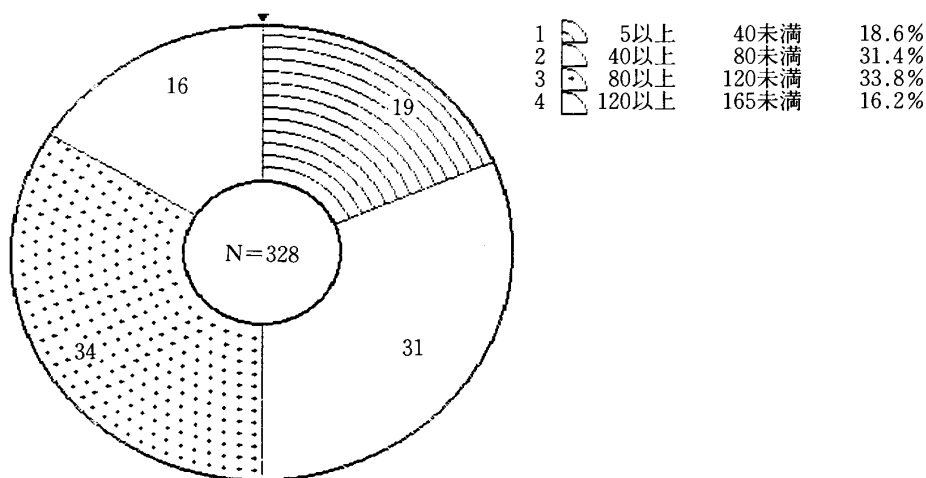


図20. 通学時間(片道, 分)

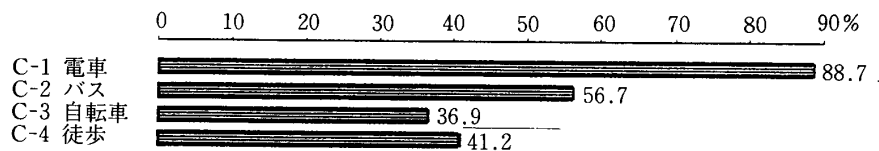


図21. 通学時の交通手段 (N=328)

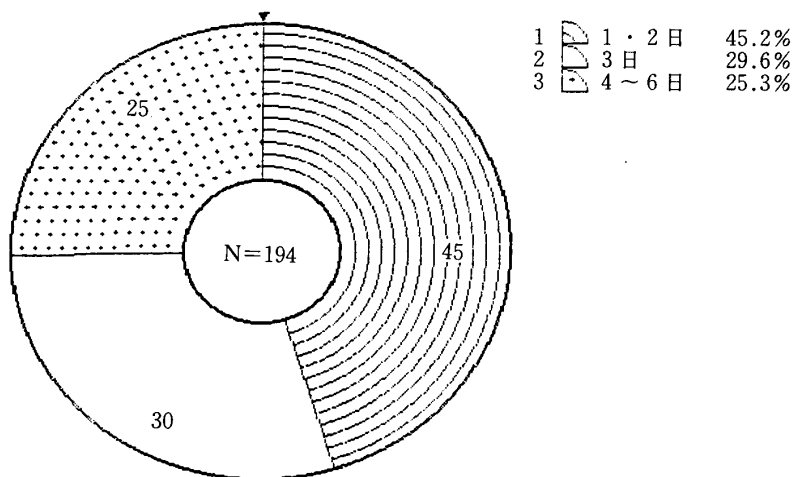


図22. アルバイト実施状況(～日/週)

事務手伝い、水泳指導などがみられた(図23.)。またアルバイト一回あたりの平均勤務時間は248分であった。総じて半数以上の者が週に2・3日、一日平均4時間のアルバイトを行なっているようである。

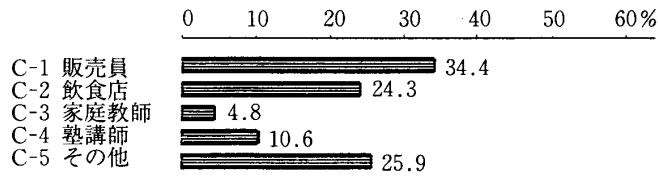


図23. アルバイトの業務内容

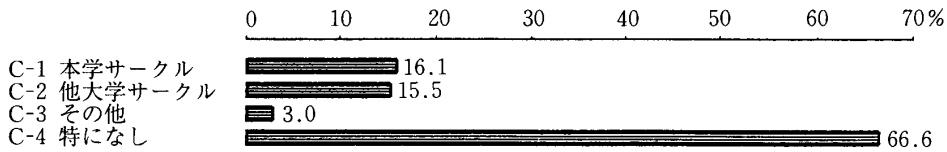


図24. 文化系サークルへの加入状況(N=329)

その他の生活環境要因をみると、一週間の授業コマ数は14～16時間/週が約7割を占めており、平均15.1時間、最小11、最大20であった。また一月あたりに自由に使える金額は平均26,064円であった。

文化系サークルへの所属の状況は図24. の通り在籍大学のサークルに加入している者は16.1%、また他大学サークルは15.5%で7割弱のものは未加入であった。

調査対象の家族のスポーツ経験者の有無を調査した結果が図25. である。本調査では本人との間柄の分類は省いたが、ほとんどが両親および兄弟である。約8割弱が家族のなかにスポーツ経験者を有している。

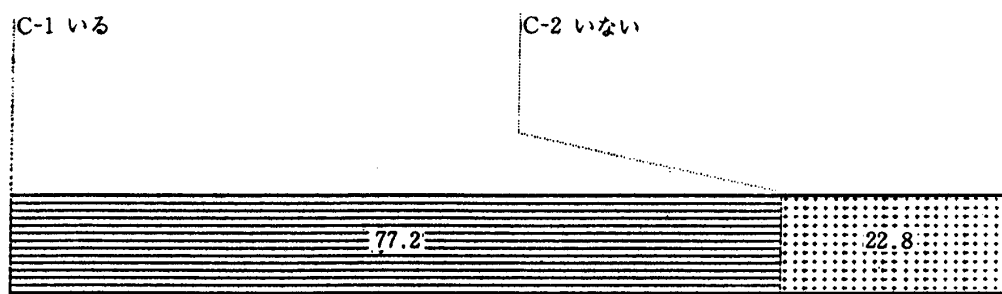


図25. 家族のスポーツ経験者の有無(N=325)

4. スポーツ参加の動機および志向について

・スポーツ参加動機の検討

因子分析(バリマックス回転)の結果、固有値1.00以上の因子は11個抽出された(表2.)。そ

女子大学生におけるスポーツ参加の検討（I）

表2. スポーツ参加動機の因子分析結果(第12因子まで)

因子 No.	固有値	寄与率	累積(%)
1	21.268	35.4	35.4
2	4.380	7.3	42.7
3	3.045	5.1	47.8
4	2.541	4.2	52.1
5	2.318	3.9	55.9
6	1.622	2.7	58.6
7	1.497	2.5	61.1
8	1.352	2.3	63.4
9	1.218	2.0	65.4
10	1.046	1.7	67.1
11	0.942	1.6	68.9
12	0.942	1.6	70.4

の内、因子の明確性を考慮し第8因子までの解釈を試みた。第8因子までの累積寄与率および各項目の因子負荷量を表3-1、3-2に示す。項目の選択は因子負荷量0.4以上で他の因子と重複させないことを基準に行なった。

1) 第1因子(親和因子)

この因子に高い負荷を有する項目は、Q22 いろいろな人と接することができる、Q21 みんなで一緒に協力できるから、Q23 仲間と心がふれあえるから、Q20 友達ができるから等である。これらの項目は対人関係の構築を示す内容であることから「親和因子」と名付けた。この因子は寄与率が35.4%と高く、8因子中最も重要な因子であると考えられる。

2) 第2因子(社会的望ましさ因子)

この因子に高く負荷している項目は、Q32 人に自慢できるから、Q33 カッコいいから、Q31 就職の際に有利であるから、Q30 マスコミでよくとりあげられているから、Q39 スポーツのファッションが素敵だから等である。これらは社会的な外見に関連しており他者の評価が含まれている。そこで「社会的望ましさ因子」とした。

3) 第3因子(人格形成因子)

Q51 忍耐力を養成できるから、Q52 勇気が養えるから、Q53 協調心が養えるから等、人格の養成に関する項目の負荷が高い。故にこの因子を「人格形成因子」とした。

4) 第4因子(レクリエーション志向因子)

この因子にはQ3 楽しいから、Q6 スポーツが好きだから、Q9 スポーツをした後、気持ちがいいから、Q10 身体を活発に動かすことが好きだから等が高い負荷を示している。これらはスポーツそのものを楽しむことを目的とした動機であり「レクリエーション指向因子」

表3-1. スポーツ参加動機の60項目の因子負荷量(N=326)

因子 (累積寄与率%)	第1因子 35.4(35.4)	第2因子 42.7(7.3)	第3因子 47.8(5.1)	第4因子 52.1(4.2)
項目 No.				
13	.499			
14	.568			
15	.550			
20	.730			
21	.673			
22	.791			
23	.720			
30		.634		
31		.693		
32		.803		
33		.745		
34		.440		
35		.404		
39		.493		
17			.579	
19			.517	
49			.539	
50			.773	
51			.825	
52			.842	
53			.805	
54			.758	
55			.651	
56			.645	
57			.779	
60			.433	
1				.541
2				.545
3				.718
4				.611
5				.634
6				.757
9				.712
10				.751
11				.675
40				.456
48				.482
58				.419
59				.490

と名付けた。

5) 第5因子(健康・美容因子)

Q42 身体がスマートになるから, Q43 姿勢がよくなるから, Q45 健康のために良いか

女子大学生におけるスポーツ参加の検討 (I)

表 3-2. スポーツ参加動機の60項目の因子負荷量(N=326)

因子 (累積寄与率%)	第1因子 55.9(3.9)	第2因子 58.6(2.7)	第3因子 61.1(2.5)	第4因子 63.4(2.3)
項目 No.				
41	.489			
42	.805			
43	.818			
44	.730			
45	.696			
8		.418		
12		.572		
24			.463	
25			.578	
26			.721	
27			.732	
28			.735	
29			.533	
7				.554
16				.459
18				.519
36				.677
37				.560
46				.517

ら等が高い負荷を示しており、「健康・美容因子」とした。

6) 第6因子(解釈不能)

この因子に0.4以上の負荷を示した項目は、Q8 日常での劣等感を忘れることができるから、Q12 刺激を求めたいからの2項目だけである。一義的な解釈ができないので命名は行なわない。

7) 第7因子(勧誘因子)

この因子に高い負荷をみせた項目は、Q28 友達が勧めるから、Q27 家族が勧めるから、Q26 友達がしているから等である。これらは周囲の人々からの勧誘が動機となっていることを示している。そこで「勧誘因子」と名付けた。

8) 第8因子(挑戦達成因子)

Q36 試合にでたいから、Q7 試合での緊張感が好きだから、Q16 自分がどれだけできるかためせるから、Q18 困難なスポーツに挑戦したいから等が高く負荷している。これらは自分への挑戦や試合への傾倒を示すことから「挑戦達成因子」とした。

以上8因子中7因子に親和因子, 社会的望ましさ因子, 人格形成因子, レクリエーション指

向因子、健康美容因子、勧誘因子、挑戦達成因子と解釈した。

これらの因子から女子大学生のスポーツ参加動機を検討すると、まず最も重要なのが親和動機であることがうかがえる。この動機は人間関係の開発や維持を意図したもので、所謂仲間作りがスポーツに参加させる契機となると考えられる。またスポーツを行なうことと社会的な好ましさの獲得、自分の人格の形成・変容を関連付けていることが推察される。また第4・5因子から、スポーツを行なうこと自体の楽しさや、健康美容の維持増進がスポーツ活動への参加に影響していることがわかる。

第7因子からは家族や友人からの勧誘がスポーツ参加の誘因になることがうかがえる。第8因子の挑戦達成因子は第1因子の親和因子と共に Murray, E.D. (1966)が一般的な行動の動機を分類したうちの社会的動機の親和動機と達成動機の範疇にふくまれるものと思われる。丹羽・村松(1977)の女子大学生を対象とした結果と比較しても、おおよそ同様の因子が抽出されている。しかし共通して認められた親和因子が9因子中、第4因子を占めるのに対して本結果では第1因子として抽出されたことが特徴である。

・スポーツ参加の志向性の検討

表4. および表5. に因子分析(バリマックス回転)の結果を示した。固有値が1.0以上の因子は10個抽出されたが、各因子に対する種目の負荷の状況から第8因子までを解釈の対象とした。そして各因子に対する負荷量の高い種目(因子負荷量0.4以上)から因子を解釈し、スポーツ参加の志向性を検討する。

その結果、各因子を下記のように解釈、命名した。

第1因子…ファッション志向因子

第2因子…武道志向因子

表4. スポーツ参加動機の因子分析結果(第11因子まで)

因子 No.	固有値	寄与率	累積(%)
1	11.309	26.3	26.3
2	3.285	7.6	33.9
3	2.534	5.9	39.8
4	1.988	4.6	44.5
5	1.729	4.0	48.5
6	1.504	3.5	52.0
7	1.432	3.3	55.3
8	1.235	2.9	58.2
9	1.095	2.5	60.7
10	1.052	2.4	63.2
11	0.973	2.3	65.4

女子大学生におけるスポーツ参加の検討 (I)

表5. スポーツ種目の各因子負荷量と累積寄与率(N=329)

種目	因子							
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子	第8因子
ゴルフ	.440							
ラクロス	.442							
スカッシュ	.461							
ヨット	.782							
ウィンドサーフィン	.818							
サーフィン	.784							
スキューバダイビング	.810							
乗馬	.567							
ハングライダー	.706							
モータースポーツ	.725							
水上スキー	.806							
柔道		.713						
空手		.802						
剣道		.647						
ボーリング			.518					
卓球			.642					
バドミントン			.728					
レクリエーション ゲーム			.526					
アイススケート			.508					
テニス			.626					
エアロビクスダンス				.741				
フィットネストレーニング				.699				
気孔/ヨガ				.415				
ダンス/舞踊				.479				
ウェイトリフティング				.406				
ウォーキング					.406			
ジョギング					.521			
スイミング					.640			
陸上競技					.505			
競泳					.617			
登山/ハイキング						.767		
オリエンテーリング						.678		
クロスカントリー						.472		
キャンプ						.740		
ライフル射撃							.672	
アーチェリー							.552	
サイクリング							.491	
バスケット								.525
バレー								.580
サッカー								.605
ラグビー								.673
ソフトボール								.575
累積寄与率%	26.3(26.3)	33.9(7.6)	39.8(5.9)	44.5(4.6)	48.5(4.0)	52.0(3.5)	55.3(3.3)	58.2(2.9)

第3因子…遊戯スポーツ志向因子

第4因子…身体トレーニング志向因子

第5因子…健康志向因子

第6因子…アウトドア志向因子

第7因子…シューティング志向因子

第8因子…球技志向因子

第3因子は該当する種目が比較的身近に施設があり遊戯的な要素が高いことから「遊戯スポーツ志向」とした。第4因子は該当した種目が民間のスポーツクラブで行なわれている種目であることから「身体トレーニング志向因子」とした。また第5因子はジョギングや水泳が一般的に健康維持のための手段とされていることから「健康志向因子」とした。

これらのことから女子大学生が種々のスポーツ種目の特徴を認知し選考、実践していく準拠枠として上記の志向性が関与していると考えられる。特に第1因子のファッション性因子は寄与率が26.3%と他の因子と比べかなり大きな値である。つまり女子大学生においてスポーツ種目の持つファッション性の程度がスポーツ参加の志向に大きく影響するようである。

まとめ

本研究では女子大学生におけるスポーツ参加を検討するために、その基礎となる 1. スポーツ参加の現状の把握、2. スポーツ参加を規定するスポーツに関連した要因及び生活環境要因の記述、またスポーツ参加の動機とその志向性の検討を行なった。

本研究から得られた主要な結果を下記にまとめる。

1. スポーツ参加の現状

- ・所属スポーツサークル
在籍大：16% 他大学：33% 未加入：51%
 - ・授業外実施頻度
一週間平均 110分、週2日以上：26%
 - ・大会/イベントへの参加 有り：17%
 - ・観戦の有無 有り：42%
-

2. スポーツ関連要因

- ・スポーツ活動への欲求程度
80%がスポーツ活動を希望

女子大学生におけるスポーツ参加の検討（I）

- ・スポーツ活動の阻害要因
1位：時間的条件 2位：金銭的条件
 - ・大学スポーツサークル活動の充足度
不十分：指導者の確保
 - ・小学校～高校の部活動経験
中学校：41% 高校：24%
-

3. 生活環境要因

- ・住居形態 自宅：79% アパート：16%
 - ・通学時間 往復 平均2時間半.
 - ・アルバイト 約60%が実施
平均週2.7日, 一回4時間.
 - ・おこずかい 平均26,064円/月
 - ・一週間の授業数 15コマ前後
 - ・文化系サークルへの加入
 - ・在籍大学：16% 他大学：16% 未加入：67%
 - ・家族のスポーツ経験者の存在
いる：77% いない：23%
-

4. スポーツ参加動機の構造

1. 親和因子
 2. 社会的望ましさ因子
 3. 人格形成因子
 4. レクリエーション指向因子
 5. 健康美容因子
 6. 勧誘因子
 7. 挑戦達成因子
-

5. スポーツ参加の志向性

1. ファッション志向
2. 武道志向
3. 遊戯スポーツ志向
4. 体力トレーニング志向

5. 健康志向
 6. アウトドア志向
 7. シューティング志向
 8. 球技志向
-

これらの結果を総括すると、「“仲間作り”を動機としたスポーツ活動欲求を持ち、スポーツ種目の“ファッション性”に関心があるが、実際に行なうにあたっては通学時間等の“時間的条件”や“お金がかかること”が阻害要因になっている。」というスポーツ参加の一般的な傾向が推察される。

今後は、本研究の結果をもとに女子大学生におけるスポーツ参加を規定する要因を吟味し、各要因間のクロス集計または多要因を一括して分析する多変量解析を用いて総合的な検討を行う。

謝辞：

データ収集ならびに統計処理にあたり、御協力くださいました先生方に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 1 荒井貞光・松田泰定「スポーツ行動に関する実証的研究(2)」
体育学研究, 22-3:154-68, 1977.
- 2 原田崇彦・菊池秀男「スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究」
体育学研究, 35-3:241-53, 1990.
- 3 東川安雄・荒井貞光他「スポーツ行動に関する実証的研究(4)」
体育・スポーツ社会学研究, 2:25-44, 1983.
- 4 伊藤豊彦・織奥信男「体育学習における児童生徒の楽しさを規定する要因と教師の認識」
体育学研究, 33-2:123-33, 1988.
- 5 金崎良三・多々納秀雄他「スポーツ行動の予測因に関する研究(1)」
健康の科学, 3, 45-57, 1981.
- 6 三宅紀子「ボディーイメージとスポーツニーズ」
スポーツ心理学研究, 17-1:34-40, 1990.
- 7 Murray. E.D. (八木 訳);動機と情緒, 岩波書店. 1966.
- 8 永吉・江橋他「フィジカルレクリエーション成立を促す要因分析—林の数量化理論Ⅱを用いて—」
レクリエーション研究, 6:21-35, 1979.
- 9 丹羽勅昭・長沢邦子「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」
体育学研究, 23-2:109-19, 1978.
- 10 丹羽勅昭・長沢邦子「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」
体育学研究, 23-2:109-19, 1978.

女子大学生におけるスポーツ参加の検討（Ⅰ）

- 11 斎藤隆志・伊藤信之他「筑波大学生のスポーツ活動選好類似性によるスポーツの分類」大学体育研究 13：57-84, 1990.
- 12 多々納秀雄・厨 義弘「スポーツ参加の多変量解析(1)」健康の科学, 2：17-25, 1980.
- 13 徳永幹雄・庭木守彦他, 現代スポーツの社会心理, 遊戯社, 1985. pp. 50-78.
- 14 和田 尚「スポーツの楽しさに関する考察」京都体育学研究, 3-1：1-10, 1987.
- 15 山口泰雄・糸野 豊他「パス解析によるスポーツ参与の分析」筑波大学体育科学系紀要, 2：68-85, 1979.